

市



立



病



院

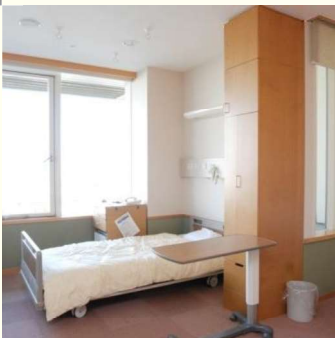
だ



よ



り



令和4年 1月号

新型コロナウイルス感染症対応と、医療の質向上への取り組み

新型コロナウイルス感染症について、市立病院では治療・検査やワクチン接種等、様々な対応を行っています。一方、感染拡大防止対策の浸透、ワクチン接種者割合の増加、抗体療法の導入や新規薬剤の開発等により、感染者数の制御・重症化リスクの軽減が期待されます。

市立病院でも新型コロナ対応最優先というスタンスを保ちながら、地域がん診療連携拠点病院（高度型）や地域医療支援病院といった当院が果たすべき医療機能・役割を活性化させる必要があると考えています。

今回は、令和3年5月に副院長に着任された藤田淳也医師に、医療の質の向上への取り組みや、副院長としての抱負や課題についてインタビューしていますので、ぜひご覧ください。



平日は市立病院としてのワクチン個別接種対応、令和3年6月下旬からは八尾市の集団接種会場の1つとして週末のワクチン接種対応を行っています。

地域がん診療連携拠点病院（高度型）・地域医療支援病院としての役割と医療の質の向上への取り組み

〜藤田副院長（令和3年5月着任）へのインタビュー〜



藤田 淳也 副院長

平成元年大阪大学医学部卒。公立病院勤務後、大阪大学大学院、コーネル大学医学部で主に基礎研究に従事。帰国後、大阪府内の病院勤務。平成 28 年から堺市立総合医療センター外科統括部長、平成 31 年からは院長補佐として勤務後、令和 3 年 5 月に八尾市立病院副院長として着任。

八尾市立病院は令和2年4月に厚生労働省から「地域がん診療連携拠点病院（高度型）」として指定されています。地域がん診療連携拠点病院の中でもより厳しい指定要件を満たし、診療機能が高いと判断されたもので、令和3年8月現在、全国で50病院が指定を受けています。

平成24年11月に承認を受けた地域医療支援病院としての機能と合わせ、医療圏における医療の質の向上に

貢献する役割が求められるところで、令和2年2月以降、新型コロナウイルス感染症への対応を最優先せざるを得ない状況でした。

ワクチン接種の浸透や抗体療法の保険適用、治療薬の開発状況、及び感染防止策の定着等により、「ウィズ・コロナ」下での社会・経済活動の活性化が模索される中、高度で安心・安全な医療サービスを提供できるよう、当院でも様々な取り組みを行っています。

今回は、令和3年5月に、ここ数年不在であった外科系副院長に着任いただいた藤田淳也医師に、がん治療を中心に新たな取り組みや、当院に対する客観的な印象等について伺いました。

― まず、当院にいらつしやるまでの経歴について教えてください。

平成元年に大阪大学医学部卒業後、大阪大学第二外科医局に入局、附属病院にて初期研修を行いました。市立池田病院勤務を経て、平成5年から大阪大学大学院、そして平成8年からはコーネル大学医学部に留学し、ニューヨークのコーネル・メディカル・センターで主に基礎研究に従事していました。

― 若い頃は、留学経験も含め、基礎研究に取り組まれていたということですね。臨床での実績についてはいかがですか。

帰国後は国立大阪病院（現：国立病院機構大阪医療センター）、市立豊中病院、NTT西日本大阪病院での勤務を経て、平成28年から堺市立総合医療センターの外科統括部長、平成31年からは院長補佐兼がんセンター長として勤務していました。

臨床現場では主に消化器外科、特に胃癌の診療を専門に手術、抗がん剤治療、緩和医療からターミナルケアまで行ってきました。胃癌手術の経験数は約1800件です。

― 藤田先生は臨床研究にも数多く関わってこられたと聞いていますが、

学術活動としては胃癌の手術、化学療法に関する臨床研究に積極的に関わってきました。大阪大学消化器外科共同研究会、JCOG（日本臨床腫瘍研究グループ）、OGSG（大阪消化管がん化学療法研究会）などの多施設共同研究グループに所属し、これまでに50以上の臨床試験に参加し数々の成果を報告しています。

― それらの学術・研究活動の経験を臨床現場にも活かしているということですね。

2000年代〜2010年代にかけては胃癌の手術治療、抗がん剤治療が大きな転換期を迎えた時期でした。それまでの拡大手術から縮小手術へ、開腹手術から患者さんの体に負担をかけない腹腔鏡手術へ、臓器の機能を保つことをめざした機能温存手術へとパラダイムシフトが起きました。

また胃癌に対する新しい抗がん剤治療が次々と登場し、手術前や手術後に抗がん剤治療を行う補助化学療法が確立されたのもこの時期でした。自分たちの行った臨床試験の結果が確かなエビデンスとして認められ、ガイドラインが改訂されていたこともあり、非常にやりがいのある仕事でした。

これらの経験は現在の日々の診療に活かされており、当院でも最新のエビデンスに基づいたグローバル・スタンダードの治療を提供することに努めています。

— 最近が高齢患者が増え、患者さんの身体状況・基礎疾患の保有状況による治療の難しさもありますか。

実際の臨床現場では高齢の患者さんや基礎疾患を持った患者さんが多く、必ずしも臨床研究の結果通りの治療やガイドラインの推奨通りの治療をそのまま当てはめることが適切ではないと思われるケースが多々あります。

治療の選択肢の引き出しを多く持ち、個々の患者さんにとっての最適な治療をいかに提供できるかが「腕の見せどころ」と考えています。

— 令和3年5月に外科系副院長として着任されたところですが、当院の外科についてPRをお願いします。

当院外科は消化器一般外科、呼吸器外科、乳腺外科から構成され、佐々木特命総長、兒玉特命院長、田村病院長以下20名の大所帯です。

消化器外科は上部消化管外科（食道、胃）、下部消化管外科（大腸・肛門）、肝胆膵外科に分かれ、各領域の専門チームが責任をもって診療を行っています。

病院規模（病床数）からみた手術数は多く、特に呼吸器外科、乳腺外科の手術数は大阪府内の市中病院の中では有数だと思っています。

がん以外の良性疾患、一般外科手術は外科全体で協力して行い、腹腔

鏡下鼠径ヘルニアの手術にも力を入れています。

緊急手術にも24時間対応できる体制を備えています。新型コロナウイルス対応のため、救急の受け入れを制限せざるを得ない時期もありましたが、感染状況が落ち着いてくれば救急もこれまで以上に積極的に取り組みたいと考えています。

— がん治療における集学的治療やチーム医療についてはどうですか。

がん治療は外科的切除手術以外にも、様々な選択肢があります。

市立病院 外科の手術実績 (令和2年度、主なもの)

【一般外科・消化器外科】

食道がん	8 件
胃がん	68 件
大腸がん	170 件
肝がん	30 件
胆・膵がん	37 件
胆石症・胆嚢炎	149 件
鼠径ヘルニア	171 件
虫垂炎	75 件

【呼吸器外科】

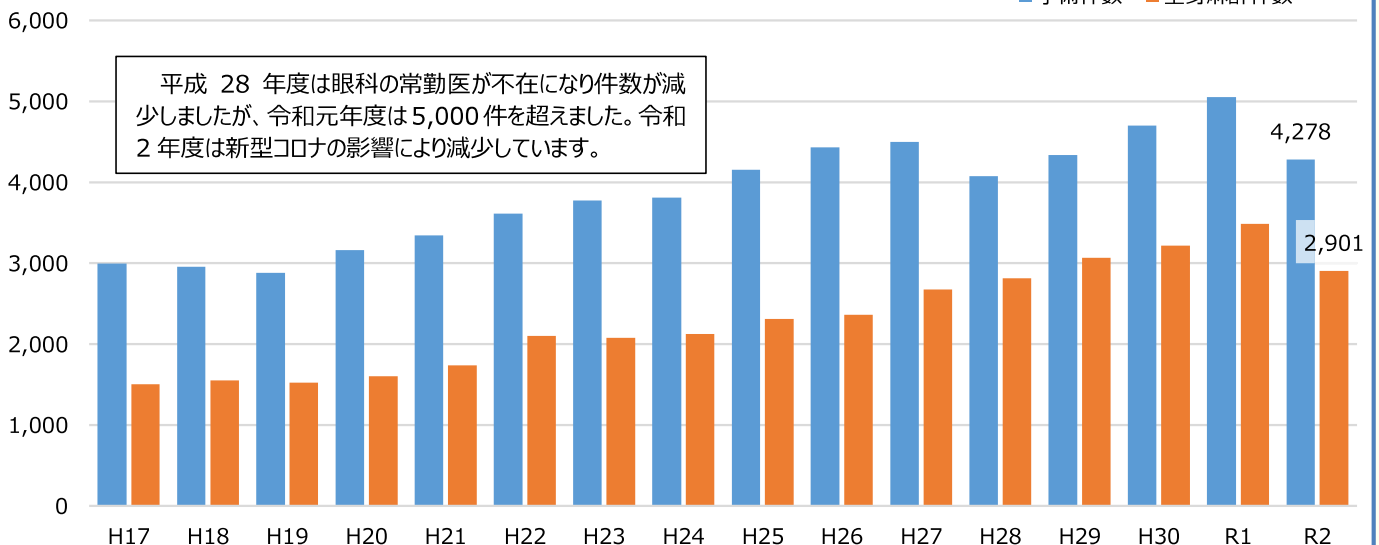
原発性肺がん	71 件
転移性肺腫瘍	27 件
縦隔腫瘍	7 件
気胸・膿胸	13 件
炎症性肺疾患・その他	16 件

【乳腺外科】

原発乳がん初回手術	194 件
※ うち、乳房温存 41 件、乳房切除 153 件（同時再建 41 件）	
乳腺良性腫瘍	38 件

手術件数（中央手術室実施分）

■手術件数 ■全身麻酔件数



「ごく早期の食道癌、胃癌、大腸癌は手術ではなく内視鏡的切除で根治できるようになっていきます。消化器内科、放射線治療科、さらに専門・認定看護師も加わって治療方針を検討するカンファレンス（カンサーボード）を毎週開き、患者さんに最適な治療を提供できるよう心掛けています。」

― 令和3年秋には手術支援ロボットも導入されたとお聞きしました。

患者さんの身体に負担の少ない腹腔鏡手術、胸腔鏡手術は以前から積極的に行ってきましたが、今秋に低侵襲手術の最先端といえる手術支援ロボットを導入しました。

ロボット手術の利点は3Dの拡大映像を見ながら希望通りの方向に動かせる多関節鉗子による手術操作が可能になったことです。術者の手の動きとロボットアームの動きの比率を変える機能や、手振れを補正する機能でより精緻な手術ができるようになっていきます。

10月に泌尿器科の前立腺癌手術から開始し、11月には直腸癌手術を実施しました。順次、胃癌、肺癌、婦人科疾患にも拡大する方針で準備を進めているところです。

― ロボット手術は今後期待できそうですね。他病院での経験を踏まえ、がん診療の全般的な傾向等について教えてください。

これまでに市立豊中病院（豊能医療圏）、堺市立総合医療センター（堺医療圏）、当院（中河内医療圏）と大阪府内の3つの異なる医療圏の地域がん診療連携拠点病院でがん診療に携わってきました。

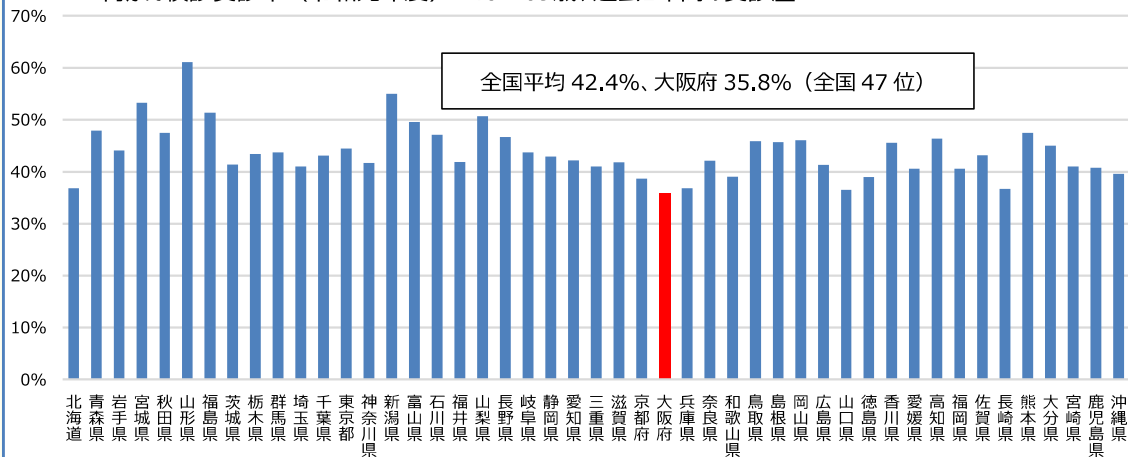
共通して言えることは、大阪府のがん検診の受診率は低く、全国でも最低レベルです。その結果、受診される患者さんは進行癌が多いことが挙げられます。

また、高齢化が進んできたために高齢者のがん患者が増えてきたことそれに伴い、併存疾患を持ったがん患者さんが増えてきたことも挙げられます。

以前は80歳を超えるとハイリスクとして特別視して手術に臨んでいましたが、近年は80歳代後半から90歳代の手術は日常茶飯事となっています。

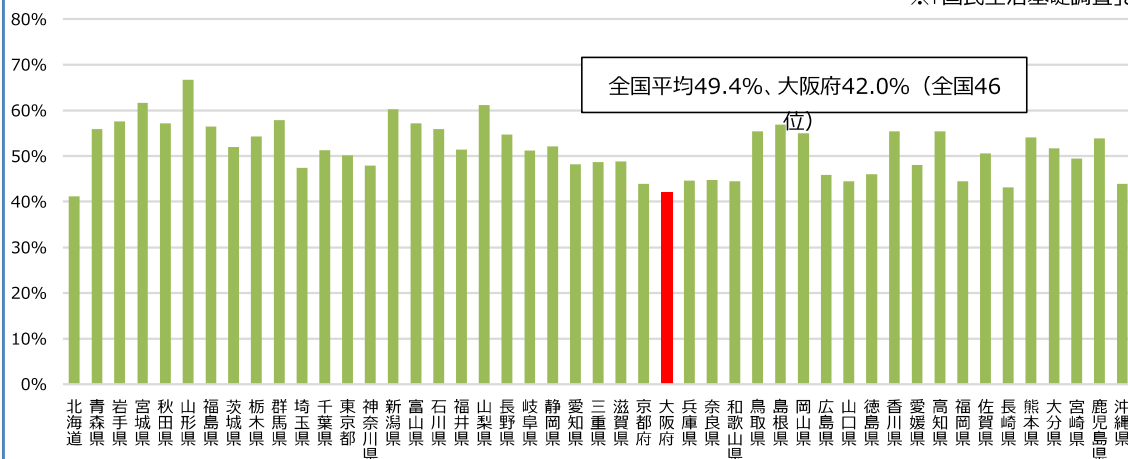
― がん検診の受診による早期発見の重要性は、がん診療に携わる医師の皆さんがおっしゃいますね。

胃がん検診受診率（令和元年度） 40～69歳、過去1年間の受診歴 ※「国民生活基礎調査」より



新型コロナウイルスの流行による「がん検診控え」「医療機関への受診控え」の影響は今年度に入ってから顕在化しており、進行癌となり症状が重くな

肺がん検診受診率（令和元年度） ※40～69歳、過去1年間の受診歴 ※「国民生活基礎調査」より



新型コロナの流行による「がん検診控え」「医療機関への受診控え」の影響は今年度に入ってから顕在化しており、進行癌となり症状が重くな

つてから医療機関を受診されるケースが増えてきています。

がんへの対応は「不要・不急」ではありません。いかなる感染蔓延状況

であっても、がん診療を手控えることなく可能な限り両立して行う必要があると考えています。

― 八尾市立病院のがん診療への取り組みはどうですか。

当院は中河内医療圏において、平成27年から国指定の地域がん診療連携拠点病院に、さらに令和2年4月からは地域がん診療連携拠点病院（高度型）に指定されています。

平成19年から厚生労働省が策定する「がん対策推進基本計画」は現在3期目に入っていますが、今期は分野別施策の3本柱として「がん医療の充実」と並列して「がん予防」「がんとの共生」が掲げられています。

がん拠点病院には、がんに対する高度な手術、化学療法、放射線治療を提供することはもちろんですが、それと同時にがんの治療中に発生する様々な問題に対応してがん患者さんの生活をサポートする体制を整備することが求められています。

― 今年度からは「がん診療支援室」を設置しましたね。

「通院治療センター」「緩和ケアセンター」「がん相談支援センター」「就

労支援センター」といった、がん患者さんに対するケアを行う部署を統括する部門として「がん診療支援室」を立ち上げました。

メンバーは医師、看護師、MSWで、薬剤師、臨床心理士、管理栄養士、事務職員等の様々な職種と連携しています。緩和医療、がん相談、就労支援、在宅療養支援、地域連携などにきめ細かく対応することを目標としています。

― 「がん教育」にも積極的に取り組まれていると聞いていますが。

若年層のうちからがんに関する正しい知識を学習する必要性から、がん教育は重要視されてきています。

当院では八尾市内の中学校・高等学校での「がん教育」にも力を入れており、医師・看護師が講師として出向き、がん情報の普及、がん予防の啓発活動を積極的に行っています。実施した学校からは非常に好評をいただいています。

― 着任早々ですが感染対策管理室長を兼務されています。新型コロナウイルス対策等、重点的に取り組まれていることがあれば教えてください。

がん教育実施状況（令和3年度）

実施日	学校名	講師
6月16日	高安小中学校	兒玉特命院長
10月13日	南高安中学校	福井副院長
10月15日	成法中学校	吉野乳がん看護認定看護師 小薄がん看護専門看護師
10月27日	久宝寺中学校	藤田副院長
11月10日	龍華中学校	田村病院長
11月12日	亀井中学校	佐々木特命総長



成法中学校での看護師によるがん教育の様子

最も厳しかった第4波の真っ只中であった5月のゴールデンウィークに当院に赴任しました。当時は30人を超える新型コロナウイルス患者が入院しており、ICU（集中治療室）は重症コロナ患者で埋まっていました。

当院には専門診療科である感染症内科も呼吸器内科も常勤医師がいない中、内科系・外科系に問わず病院を挙げて新型コロナウイルス診療に対応していたことは大きな驚きでした。また病院の各部署のスタッフが知恵を絞って協力し、一人でも多くのコロナ患

者を受け入れようとする姿勢に感銘を受けたのを覚えています。

現在は感染の波はやや収まっていますが、来るべき次の波に備えての準備が必要だと考えています。

新型コロナウイルス発生後ほぼ2年が経ち、新規薬剤も数々承認され、治療に関してはかなり確立されてきました。今後重要なことは感染状況にに応じて臨機応変、機動的に病院の診療体制を動かしていくことです。そのためには地域の医療機関や行政にも働きかけていく必要性も感じています。

― 地域医療連携についてはどのようにお考えですか。

新型コロナウイルスの影響は当院だけではなく地域の医療全体に及んでいます。感染状況が落ち着き次第ですが、日頃お世話になっている医療機関を訪問し、顔の見える関係を築いていきたいと思っています。また地域医療連携を目的としたセミナーも対面形式で開催していく予定です。

― 着任後半年以上が経過しましたが、市立病院の印象はどうですか。

ほぼ駅に直結している利便性と、ホテルのように凝った外観・ロビー周りには感心しました。病棟の廊下は広くゆったりとしており、木目パネルとカーペット敷きの内装からはとても暖かみを感じられます。

設備、医療機器については必要なものはほぼ揃っていますが、外来処置室、内視鏡室、地域医療連携室、入院支援センターなどについては絶対的なスペースと設備が不足していると感じられますので、今後の検討課題になると思っています。

― 病院スタッフの印象についても教えてください。

赴任して感心したことは、院内ですれ違う職員が「挨拶を交わす」習慣が根付いていることです。とても気持ちよく感じています。

また八尾の土地柄かどうかわかりませんが、職員の皆さんにギスギスしたところがなくフレンドリーな印象を受けており、とても働きやすい環境だと感じています。

― 藤田副院長は外科医として長年活躍されています。手術等、ストレスの多い仕事だと思いますが、ストレス解消法等があれば教えてください。

旅行が好きなのですが、コロナですっかり行けなくなってしまうと思います。また、色々な土地に出かけて行くことができるので、以前は機会を見つけては国内外の学会に参加することも楽しみにしていました。

大学卒業以来30年以上に渡って身長186cm、体重76kgをキープしてきましたが、コロナによる外出控えのためか、職場が変わったことによるストレス(?)のためか、急速に体重が増加しています。普段なかなか運動ができないので、せめて院内では極力階段を使うようにしています。

― 186cmということで、現在、市立病院の医師の中では最も目立つ(?)存在ですね。

さて、今後強化していきたい分野、解消したい課題、将来展望などについてコメントをお願いします。

地域がん診療連携拠点病院（高度型）としてがん診療をさらに充実させたいと思っています。高度のがん診療機能を充実させることはもちろんですが、ますます増える高齢者、特に背景に併存疾患を持つ患者に對しきめ細やかな対応ができる療養支援体制をめざしたいと考えています。治療のみならず療養支援、生活支援までを含めた対応ができればと思っています。

また、今後さらに発展することが期待される医療への対応ということで、「がんゲノム診療連携病院」の指定をめざしたいと考えています。

― がん診療以外の部分についてはいかがですか。

総合病院として欠けていると思われる診療科の整備も進めていきたいと考えています。

そして、地域医療支援病院として

の役割を果たし続けるため、その一環として、当院ではかかりつけ医の紹介状をお持ちの患者さんに対し、急性期病院が担うべき診療に特化していきたいと思っています。

さらに、人間ドック等の健診は地域で実施している医療機関が多いことから、当院では行わず、治療や精密検査を通じて地域医療に貢献していくことを次年度に向けて検討中です。

また、外来、検査スペース等、ハード・ソフト面ともまだ十分とはいえません。望ましい医療サービスを提供するため、環境を整備して何とか改善していきたいと思っています。

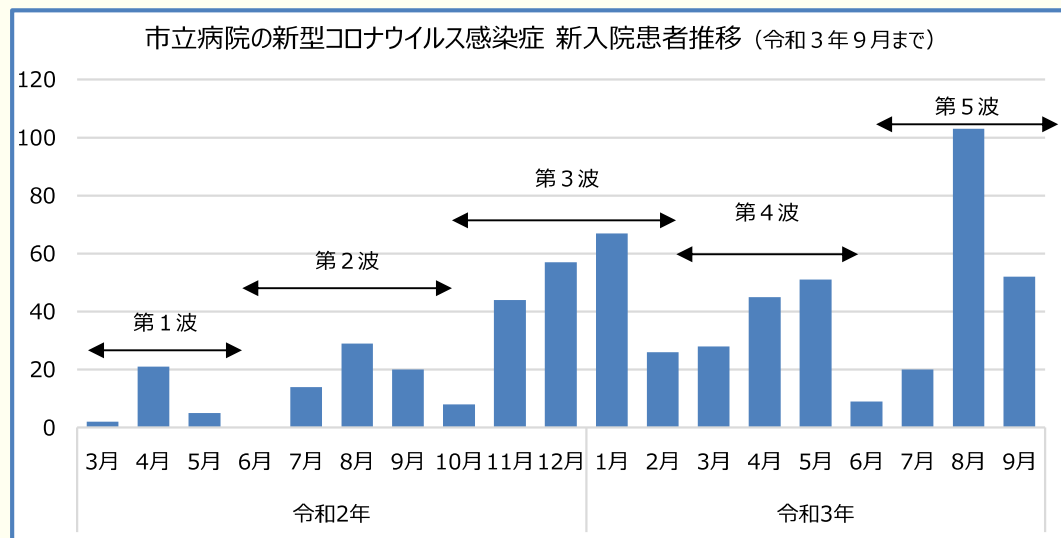
「患者さんから選ばれる病院」、「地域医療機関から選ばれる病院」をめざすことはもちろんですが、同時に医学生、若い医師からも「八尾市立病院で働きたい」と選ばれる病院をめざしたいですね。

― 若い頃から臨床に研究・学術に熱心に取り組まれてきた藤田副院長ならではの言葉ですね。

職員が安心・満足して働けてはじめて患者さんに安心・満足な医療が提供できると考えていますので、今後ともよろしくお願いいたします。

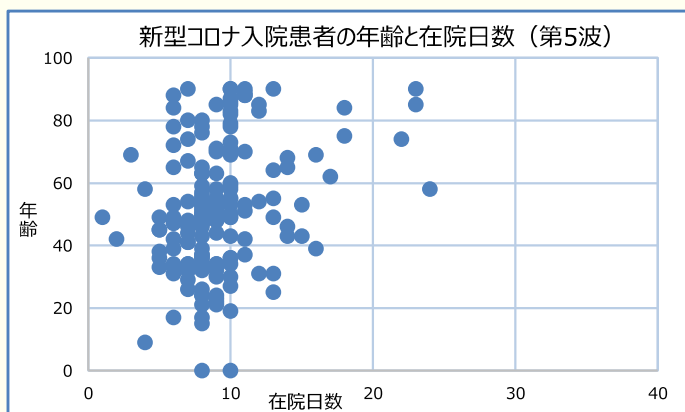
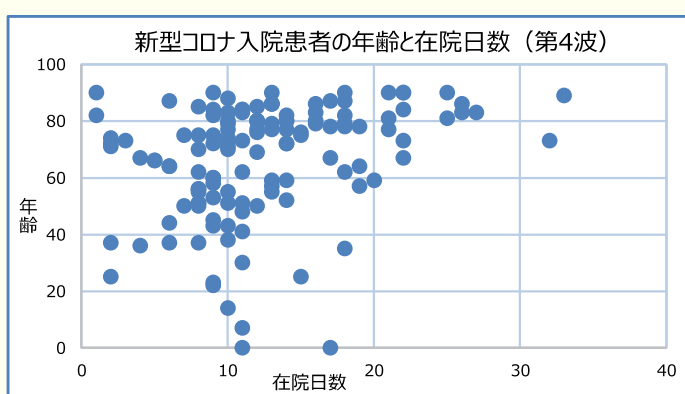
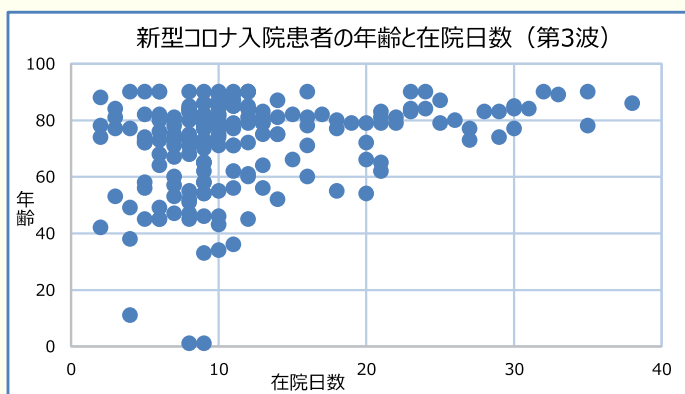
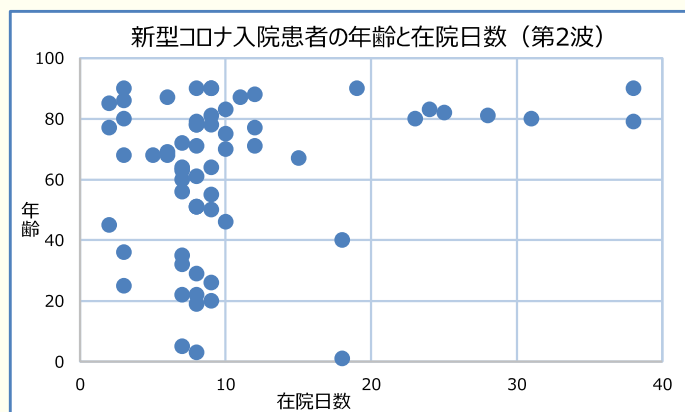
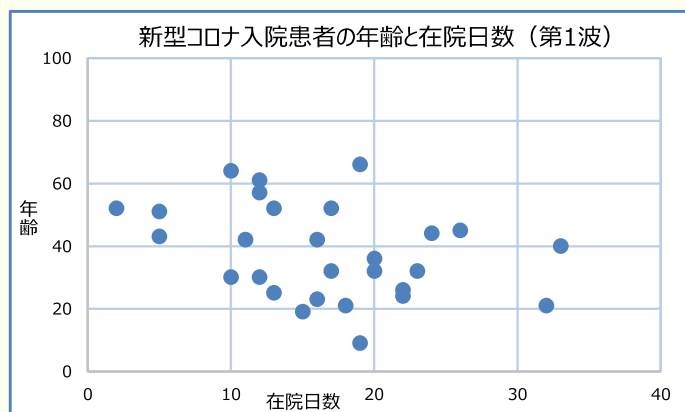
新型コロナウイルス感染症への対応(治療・検査・ワクチン接種について)

市立病院で行っている治療・検査・ワクチン接種等、新型コロナウイルス感染症への様々な対応について報告させていただきます。市民の皆さまにも情報を共有いただき、今後も感染防止対策の励行等に取り組んでいただきたいと思います。



市立病院における新型コロナウイルス感染症の新入院患者数の推移です。第1波～第5波にかけて、新入院患者の受け入れ数は徐々に増加していきま

した。特に、第4波においては、大阪府内の重症患者用病床が満床となり、主に軽症・中等症の入院治療に当たっていた当院においても重症患者の治療の必要性が生じたため、かなり逼迫した状況となりました。



上記は、各時期の新型コロナウイルス感染症の入院患者の年齢と在院日数を示す散布図です。

第1波：PCR検査で2回連続陰性にならないと退院できなかった時期。在院日数のバラツキが見られます。

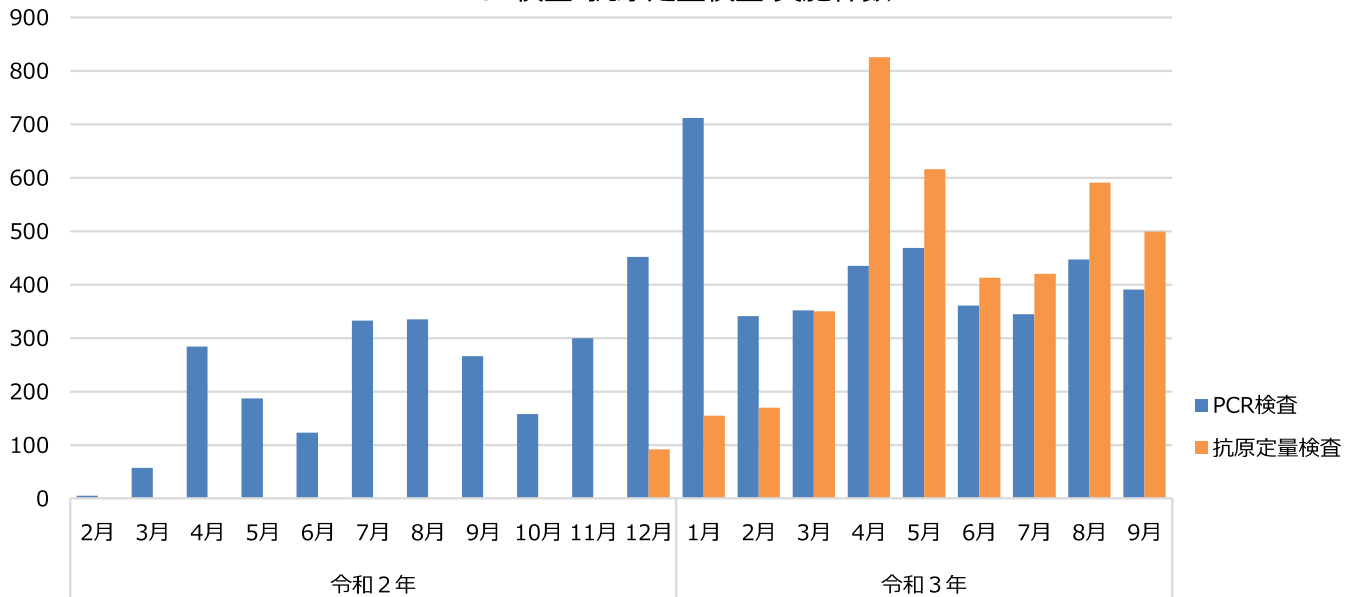
第2波：発症後10日時点で症状軽快なら退院可能という退院基準が示され、在院日数が短縮された時期。

第3波：高齢者のクラスター発生等による入院が多い時期。重症ではなくても長期入院になるケースもありました。

第4波：重症による長期入院が発生した時期。第3波よりも若い患者も増えました。

第5波：患者数は多いものの、7～10日で退院する患者が多かった時期。20～60歳の割合が増えました。

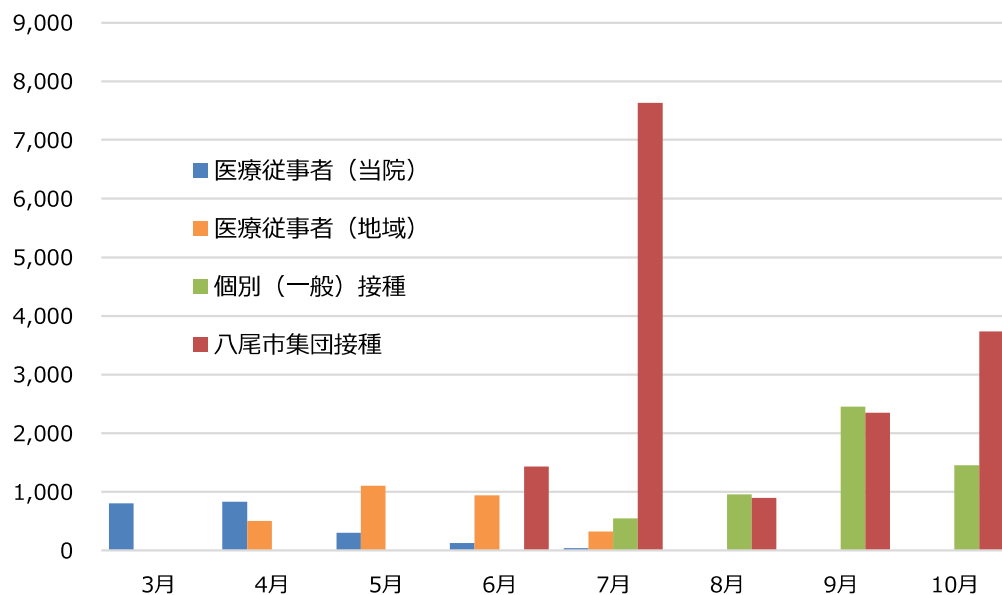
PCR検査・抗原定量検査 実施件数



新型コロナに関する PCR 検査は、令和 2 年 3 月には PFI 事業者の協力による検査体制の整備ができ（夕方までの検体採取分は翌日午前に結果報告）、さらに令和 2 年 10 月には院内に PCR 検査機器を導入しました。

また、令和 2 年 12 月からは抗原定量検査も可能な体制になり、令和 3 年 9 月までの期間に 10,000 件を超える検査対応を行いました。特に第 4 波（令和 3 年 3 月～6 月）・第 5 波（令和 3 年 6 月～）では件数が多く、月間 1,000 件を超える月もありました。

ワクチン接種状況（令和3年10月までの実績）



新型コロナワクチン接種については、令和 3 年 3 月に医療従事者向けの接種をスタート。6 月後半からは八尾市の集団接種会場の 1 つとして、週末に 1 日最大約 900 人の接種に対応してきました。

3 月から 10 月までの累計接種回数は約 26,500 回。公立病院として、感染予防、感染による重症化予防に一定の貢献を果たしてきました。



大規模接種（1 日最大 960 人）に対応するため、1 階は待合・受付専用スペースに、2 階外来フロアで予診・ワクチン接種及び接種後の待機スペースとして、毎週末に大幅なレイアウト変更を行いました。